

令和6年度研究実施結果に係る中間・事後評価結果

1. 日時： 令和7年6月6日(金) 9:55～15:30

2. 場所： 福岡県工業技術センター

3. 研究課題評価委員（敬称略）

仲 孝幸	公益財団法人 飯塚研究開発機構 テクニカルコーディネーター
藤本 潔	公益財団法人 北九州産業学術推進機構 グリーンイノベーション推進本部 産学連携センター 研究支援グループ統括部長
森 直樹	九州工業大学 次世代軟磁性材料社会実装推進センター 特任教授
寺島 祐二	株式会社 久留米リサーチ・パーク テクニカルコーディネーター
古川 勝彦	九州大学 学術研究・産学官連携本部 教授
高倉 剛	公益財団法人 福岡県産業・科学技術振興財団 産学コーディネータ
植村 聖※	国立研究開発法人 産業技術総合研究所九州センター 所長

※当日欠席

4. 評価結果： 事後評価 5課題（課題評価結果一覧(事後評価) 参照）

中間評価 3課題（課題評価結果一覧(中間評価) 参照）

※若手研究1課題は評価対象外

5. 講評(要約)

- 良い成果が得られている。企業への技術移転の段階でうまくいかない例を多く見てきたが、取り組み次第で成功させることも出来る。各所で一丸となって製品化を推進してほしい。また次々に生まれる新しい技術への優位性を維持する研究開発と企業への情報提供を行い、開発技術の普及に努めてほしい。
- ニーズ変化が速い時代には、何を解決すれば効果的かを考えなくてはいけない。そのため聴くべき人から意見を聴いた上で研究開発を実施することを望む。開発技術の「受け手」の育成も行ないながら、今後も視野を広くもった自由な発想で研究を進めてほしい。照明という成熟した技術が他分野展開で息を吹き返したのは良い例である。
- 県の立ち位置、企業の状況をよく理解して研究を進めている。データサイエンスへの取り組みの重要性が増しているので、そのような視点での研究にも期待する。また開発技術を社会実装するにあたって、コスト感、市場性を意識しておくことも求めたい。
- 全体を通じて理解しやすい形に発表がまとめられており、レベルが高い印象である。今回終了した研究課題を社会実装にするにあたって、企業と地域どちらの課題を解決するかでアプローチが異なってくる。地域の課題解決には幅広く仲間を集めることを、企業の課題解決はデータを集め分析し研究開発の精度を上げることを考えて進めていただきたい。ま

たデータベースの話があったが、これはできるだけオープンにしていき、企業が自立して活用できる方法を検討してほしい。

- 評価技術に関する課題が多かったのが印象的である。様々な評価技術が確立されていくことで県内企業の研究開発の底上げにつながると期待される。開発技術が企業の底上げにつながると期待される。今後は開発した評価技術の精度を高め、企業にとって使いやすくなる工夫を行ってほしい。そのための AI 活用、大学との連携にも期待する。
- どの研究課題も必要かつ有益なものであった。技術は開発するだけでなく企業へ普及させるためのフォローアップも重要である。開発途上の技術には完成に向けて必要とされるものは何であるか、開発した技術には今後どのように普及を図ることが必要なのかを考え、フォローを続けてほしい。

以上